

研究ノート

第2回熱海市観光ヒアリング調査報告¹

狩野美知子・野方 宏

はじめに

静岡大学人文学部経済学科の教員からなる観光研究プロジェクト・チームは、2009年8月24日に、熱海市観光経済部観光課に対する観光ヒアリング調査を、以下のように実施した。

日時：2009年8月24日 13:30～15:00

応対者：熱海市観光経済部観光課観光企画室 室長 中田吉則 氏
同上 井上真喜 氏

ヒアリング調査の実施にあたり、事前に以下の調査項目を送付した。これに沿った形でヒアリング調査の記録を中心に、適宜、関連ホームページおよび新聞記事を参考に分析を含めたものを以下にまとめる。第1節の最近の観光動向については、筆者らが熱海市の委託を受けて、2009年1月に行った「熱海市観光客動線調査」の結果²についても簡単にふれている。

1. 観光統計関連資料の収集および最近の観光動向
2. 観光振興についての取り組み・支援策と他市町村との連携など
3. 観光資源と観光産業の位置付け
4. その他

なお、本プロジェクト・チームは、2004年12月にも熱海市観光文化部観光商工課および熱海温泉ホテル旅館協同組合に対しヒアリング調査を実施しており³、今回は第2回目のヒアリング調査で

¹ 今回のヒアリング調査を含めた2009年度の観光研究プロジェクトに対し、静岡大学人文学部経済学科から、研究資金の助成を受けた。また、ヒアリング調査にご協力いただいた熱海市観光企画室の中田吉則氏、井上真喜氏にお礼申し上げる。

² 詳しくは、狩野・野方（2009）を参照されたい。

³ 詳しくは、野方（2005）を参照されたい。

ある。

1. 熱海市の観光動向

(1) 観光動向の概要

熱海市は伊豆半島の玄関口に位置し、人口は40,906人（2008年9月現在）である⁴。昔から温泉地として有名であり、観光は市の主要な産業となっている。市内には、熱海温泉（中心市街地エリア）、南熱海温泉（網代・伊豆多賀エリア）、伊豆山温泉、伊豆湯河原温泉（泉地区）の4つの温泉があり、ホテル・旅館の半数は熱海温泉に集中している。宿泊施設数の推移〔図1参照〕をみると、1980年に859軒あった宿泊施設は2007年には357軒と半数以下に落ち込んでいる。特に寮・保養所は激減し、27年前と比べると、その数は約3分の1となっている。

観光入込客数（宿泊客数+観光レクリエーション客数）⁵〔図2参照〕は、2001年度までは800～900万人台で推移してきたが、2002年度以降徐々に減少し、2007年度では約633万人とピーク時（1991年度：約940万人）の約3分の2の水準となっている。静岡県全体の観光交流客数が2002年度以降増加の傾向にある⁶ことから考えると、相対的に地盤沈下しているようにも見えるが、熱海市の統計のとり方が入湯税を基本とし、部分的に観光施設の入場者数を加えているという点も考慮する必要があると思われる。宿泊客数でみると、1991年度の約440万人をピークに徐々に減少し、2002年度以降290万人前後で推移している。こちらもピーク時の約3分の2の水準となっている。

直近でいえば、今年のゴールデンウィーク以降、「高速道路1000円」の影響か、宿泊客が少ない。また、例年一番の賑わいをみせる夏も、天候の影響で宿泊客が低迷している。図3で示されるように、8月の次に観光客が多いのは、梅園まつりが開催される1～2月となっている。

観光施設等の利用客数〔図4参照〕をみると、全体に利用客が減少傾向にあるなか、2000年に熱海市が取得し一般公開されている起雲閣や、1998年度から運行されているガイド付き「湯～遊～バス」の利用が着実に増えている。たとえば、起雲閣の場合、当初2,500人ほどであった入場者数が2007年度には約92,000人に、「湯～遊～バス」の利用者は27,000人から41,000人に増加している。

⁴ 総務省統計局の人口推計によれば、日本の人口は2004年の127,786,988人をピークに微減、微増を繰り返し、全体として徐々に減少し、2009年3月現在127,567,321人となっている。熱海市の場合、これよりはるかに早い1965年にピーク（54,540人）を迎えた特異な市となっており、その後徐々に人口が減少し現在に至っている。特に平成に入ってからの減少幅が大きく、経済産業省地域経済研究会（2005）によるシミュレーションでは、2000年の43,000人から2030年には26,000人と39.9%の人口減少が推計されている。39.9%という人口減少率は全国269都市圏の推計のうち6番目に大きなものである。

⁵ 最近では、宿泊客数とレクリエーション客数を合わせて観光交流客数という表現が多いが、今回のヒアリング調査により入手した資料では観光客入込客数となっているため、本稿ではそれに合わせている。

⁶ 詳しくは、静岡県産業部観光局観光政策室（2008）を参照されたい。

(2) 観光客の特性：「熱海市観光客動線調査」より

前述のように、筆者らは熱海市からの委託を受け、2009年1月に熱海市を訪れている観光客に対してアンケート調査を行った。以下、その調査結果の概要について簡単にまとめる。

まず、観光客の半数が東京都と神奈川県から来ており、これに埼玉県、千葉県を合わせると首都圏で3分の2を占めている。さらに、県内からの観光客が2割であり、圧倒的に近場からの観光客が多い。これと関連して、日帰り客が3割強、1泊2日が6割と滞在期間は短く、1人当たりの旅行予算は、1万円未満が2割、1～3万円が4割強と、「安・近・短」の手軽な旅行を楽しんでいる様子がみえてくる。来遊回数でいえば5回以上が過半数を占め、「毎年来る」「年に数回来る」といったヘビー・リピーターの多いことが特徴である。年齢的には50歳以上の観光客が6割近くを占め、この数字は近隣の伊東市と比べ、2割以上多くなっている。

旅行形態でみると、2人連れが全体の4割を占め、これに1人、家族旅行をあわせた個人旅行客が全体の7割を占めている。調査方法⁷の限界もあり、この数字から直ちに個人旅行が多いと結論付けることはできないが、ひところの「熱海＝団体旅行」のイメージは様変わりしているようである。また、熱海の印象を尋ねた部分では、観光施設・宿泊施設ともに料金が高いと答えた人は1割弱であり、「熱海＝物価が高い」というイメージも変わってきているようである。

熱海市までの交通手段は鉄道利用が5.5割と多く、次いで自動車の3.6割である。この鉄道利用で訪れた人びとの半分弱の人が、市内の移動手段として徒歩と答えている⁸。自由記述の回答にみられるように、「徒歩で移動できる」「コンパクトにまとまっている」「歩きながら楽しめる」といったところが熱海の魅力の1つである。湯～遊～バスの利用者は全体の1割弱であるが、利用者からの評判は良い。バスの宣伝をいかに広めるかが課題であろう。また、熱海の魅力は温泉や景色・自然をあげる人が多いが、街の風情・ノスタルジックな雰囲気や人柄・商店街といった熱海の「街」そのものを魅力に挙げる人がいたことは特筆すべきことであろう。

このように、熱海への来遊者は年齢層が高く、徒歩で市内を移動する人が多く、街そのものの魅力を評価する人が多いことから、「ゆったりした街あるき」といったコンセプトを軸にした観光振興が考えられるだろう。

⁷ 1グループにつき1名からの回答を基本としている。

⁸ 熱海市内の移動手段は、自動車利用3割の次に徒歩が多く、全体の4分の1を占める。

2. 観光振興についての取り組み

(1) 概要

2007年12月に策定された熱海市観光基本計画（以下、「基本計画」）では、「長期滞在型の世界の保養地」を目指して、①温泉中心主義 ②もう一度行きたくなる街 ③歩いて楽しい温泉保養地 ④全員参加のまちおこし と謳っている。現在のところ外国人誘客のための具体策はないが、この基本計画に対する地道な取り組みが行われている。

具体的には、地域に潜在する資源の活用のため、温泉の効能、芸者を含めた「人」のアピール、まち歩きガイドの養成である。これらの資源については次節で詳しく述べるが、こういった資源をアピールし活用することにより、まずは熱海に1泊2日の滞在をし、この間の2昼食もとる観光客を増やすことが当面の取り組みである。こういった観光客を増やすための1つの方策として、梅まつり以外の時期にも梅園の散策が楽しめるように、現在、梅園の工事も進めている。

「基本計画」に盛り込まれていた「国際観光地にふさわしいカジノ施設の導入」については、現在の市長は明確な態度を表明していない。情報や判断基準の収集段階であるとし、実質的に計画は中断している。

(2) 外国人誘客

前述のように、現在、熱海市としては積極的な外国人誘客の支援策を行っていないが、パンフレットは英語、韓国語、中国語のものを作成している。道路標識、観光案内板については、新しいものは4ヶ国語（日・英・韓・中）対応になっているが、まだ日・英の2ヶ国語対応のものが多い。

中国や台湾からの団体客を誘致するためには営業活動が必要であり、また受け入れる宿泊施設にある程度の規模がないと誘客は難しい。このため、熱海市内でもこういった国々からの誘客に取り組む施設は数軒に集中している。

熱海市としては外国人観光客の統計は取っていないが、ヒアリング調査時に入手した熱海温泉ホテル旅館協同組合の資料によれば、2007年度外国人宿泊入込数は、全体として30,968人となっている。その内訳は、韓国9,817人、米国7,388人、中国5,152人、台湾2,089人、その他6,522人である。前回の熱海市観光ヒアリング調査の資料⁹によれば、2002年度の外国人宿泊客数は、韓国4,498人、米国1,469人、中国1,719人、台湾4,270人、その他1,045人の合計13,001人となっており、この5年間に全体で約2.4倍に増加している。

⁹ 詳しくは、野方（2005）を参照されたい。

(3) 広域観光

広域観光については、フォーマルな形ではないが、機会があるごとに箱根町、小田原市、真鶴町、湯河原町との連携を意識している。特に、箱根町には観光キャンペーンに出かけている。神奈川県が箱根町、湯河原町、真鶴町を「県西」観光地帯と位置付け活動を開始したため、熱海市もこの観光圏への参加要請を検討している。ただし、この場合、伊豆の他地域との関係をどうするかという問題が生じる。

国や県の音頭で、伊豆の他地域との協議会は複数存在するが、年1回の総会と事務局研修に参加する程度である。全般的に広域連携の取り組みは低調といえる。

3. 観光資源とその活用

前節でみた「基本計画」の策定を契機に、地域に潜在する観光資源の活用を図る取り組みが行政、市民、観光業者の連携のもと新たに展開されている。従来行われていた活動に加えて、「基本計画」での温泉・人、および明治以降の文豪・政財界人に関連した歴史・文化というイメージを下敷きにした活動のいくつかを、以下具体的に紹介していこう。

(1) 温泉と健康

熱海の温泉は千数百年の歴史があるといわれ、明治時代には湯治場として栄え、1934年（昭和9年）の丹那トンネル開通以降に急速な発展をみた。また、戦後の高度成長と期を同じくして熱海は全国区の観光地として「ハネムーンで行きたい場所ナンバーワン」にまでなった。しかし、バブル崩壊以降の日本経済の長期低迷状態を反映して、他の有名観光地同様熱海の観光客数も大きく低下し、市内の老舗旅館やホテルの相次ぐ廃業に象徴されるように、観光地としての熱海の地盤は大きく沈下してしまった。

こうした状況の中で、湯治の伝統につながる温泉地熱海の魅力を再発見してもらおうという活動が、地元の医師を中心に1999年に「AMIC (Atami Medical Internet Club)」として設立され、2001年には特定非営利活動法人（NPO法人）「エイミック」に衣替えされた¹⁰。エイミックは、「熱海養生法」として知られる熱海の温泉につかりながらストレッチをする温泉療法を考案し、現在その本格的な普及に努めている。また、熱海温泉と観光知識を兼ね備えた観光案内人「温シェルジュ」の養成・認定するプログラムを2005年から実施している。2008年6月に熱海市が主催したイベント「七湯と路地裏めぐり」では、温シェルジュがガイド役を果たした。熱海市もこのようなエイミッ

¹⁰ エイミックについては、以下のホームページを参考にした。 <http://www.atami-amic.com/>

クの活動に対し、委託料という形で支援を行っている。

(2) 梅園

熱海梅園は1886年（明治19年）に開園され、本年が開園123年目となる。樹齢100年を超える梅の古木を含め700本以上の梅を中心にさくら、紅葉が楽しめる。また、園内には韓国庭園や中山晋平記念館が併設されている。1月中旬から3月上旬に行われる熱海梅園梅まつりは熱海最大のイベントであり、60万人近い観光客で賑わう。

熱海市は2008年から始まった100年ぶりのリニューアル工事を機に、リニューアル後の梅園を「日本一早咲きの梅、日本一遅い紅葉」というフレーズでアピールし、併せて全国区の河津桜よりも早い「日本一早咲きの熱海桜」を街中に増やす取り組みを進めている。

(3) まち歩きと人材養成

「基本計画」で強調されている地域資源の活用という点は、最近の観光をめぐる基本的論点となっており、その意味で地域資源活用の具体的内容は、観光を研究するものにとって興味深い。「基本計画」の策定以前からこうした観点からの取り組みは、少しずつではあるが試みられていた。それはまち歩きを新たな観光資源として位置づけ、それを担うガイド役となる人材を養成しようとする試みである。以下、そうした試みについて述べていこう。

熱海にある観光施設、名所・旧跡、文化遺産などは比較的まとまった地理的範囲内にあるが、平地が少なく坂道が殆どであるため、これまではまち歩き観光は盛んではなかった。しかし、観光客にとって限られた時間でまち中を巡る交通サービスがあれば便利である。1998年より「湯～遊～バス」というバスサービスの運行が始まり、熱海市が養成したガイドが添乗し、各停留所周辺の観光スポットの紹介、見どころや歴史などの紹介を行っている。利用者も順調に増加してきていることは、第1節で述べたとおりである。

また、「湯めまち湯ったりひと巡り」として、熱海市ではテーマごとに13の観光コースを紹介している。熱海七湯を巡る「名利と湯けむりコース」、坪内逍遙の旧舎である双柿舎や錦ヶ浦を巡る「文学と名勝へのいざないコース」、軽便鉄道機関車や芭蕉の句碑を巡る「熱海ロマン散策」など、熱海ならではのバラエティに富んだ内容になっている。

「基本計画」策定以降ではまち歩きイベントが活発に行われるようになった。例えば、(1)で紹介した「七湯と路地裏めぐり」では、温シェルジュをガイド役に市民や観光客約30人が中心市街地を2時間ほど歩いた¹¹。2009年1月には「熱海温泉玉手箱（オンたま）」が行われた。「オンたま」は市と観光協会によって新たに企画された試行イベントで、市民ガイド、商店、NPOなどが連携し

¹¹2008年7月3日付『静岡新聞』夕刊による。

て地域資源を生かした20ほどの体験プログラムを観光客に提供するものである¹²。

以上みてきたようなさまざまなまち歩きイベントを実施する上で不可欠な「インフラ」がまち歩きのガイド役であり、ガイド役という人材の養成である。熱海市はこれまでも「湯～遊～バス」のガイドや2000年に公開を始めた起雲閣のガイドを養成してきたが、2008年度より市が「まち歩きガイド養成講座」を設け、人材の養成に本格的に取り組み始めている。ここでは意識的にボランティアといういい方を使わずガイドといういい方をしている。それは観光案内を有償化することによって、ボランティアを理由にした甘さを避けプロ意識を持ってもらうためだという。

2008年度の講座修了生31名は、2009年5月に「熱海まち歩きガイドの会」を設立し、観光客や市民が熱海のまち歩きを楽しめるよう、会独自のまち歩きコースの選定を目指す活動を開始した。そして、夏の観光シーズンに合わせて中心市街地を2時間程度で巡る8コースを独自に設定し、まち歩きイベントを実施することになった¹³。

(4) その他（建造物など）

市内には明治以降、文豪が逗留したり居を構えたりした建物や政財界人の別荘が数多く残っており、その中には古き良き時代の面影や伝統と風格がうかがわれる邸宅もいくつかある。熱海市が所有・公開している起雲閣や旧日向邸もそうしたものの代表例である。起雲閣は市内中心街に近いところに立地し、敷地約3,000坪、有数の大庭園を持ち、鉄道王根津嘉一郎が1919年（大正8年）に建てた別邸であり、志賀直哉、山本有三、谷崎潤一郎、太宰治など多くの文人墨客が訪れたことでも知られている。ここでは10名ほどのガイドが邸内の説明にあたっている。

旧日向邸は熱海駅の南、相模湾を眼下に望む高台に立っている小さな邸宅である。ここは世界的にも著名であり、日本の文化と風土を愛したドイツ人の建築家ブルーノ・タウトが設計したもので、日本に現存する唯一の作品である。

こうした明治・大正・昭和にわたる建造物や名だたる文人の来遊・居住などのイメージを生かすために、「大正ロマン・昭和風」の街灯の工夫や石畳などの整備も行われている。

最後に、特産の柑橘類であるダイダイについて触れておこう。熱海市と伊東市はダイダイの全国一の産地であるが、酸味が強く生食に適さないため調味料などの加工用や正月の飾り物としてもっぱら使われていた。しかし、正月の飾り物としての利用が減ってきていることもあり、ダイダイの名産品化が地域おこしも関連して試みられている。例えば、伝統料理である「ダイダイ寿司」を復活させ、菓子、茶、入浴製品などの関連商品の開発を進め、土産物などとして市販しようとする

¹²2009年1月9日付『静岡新聞』による。なお、第2回「オンたま」が2009年9月19日から11月1日まで開催されている。

¹³2009年5月12日付および7月16日付『静岡新聞』による。

試みなどが現在進行中である¹⁴。

4. その他

(1) 富士山静岡空港の開港

2006年6月富士山静岡空港（以下、静岡空港）が予定より3カ月遅れて開港した。開港が地域の経済、特に観光にどのような影響を及ぼすか、については地域によって大きく異なるし、それが行政の取り組みにも反映される。

熱海市の場合、静岡空港開港に伴って特別の取り組みは基本的には行っておらず、静岡空港関連のパンフレットなどを置いている程度である。熱海の観光客の3分の2が首都圏からであり、こちらのリピーター化を図ることが誘客の中心となっているからである。また、ヒアリング調査に際しては、就航先に鹿児島、小松、千歳といった有名観光地（温泉地）を控えた空港があることから、県内の観光客がそちらに吸い取られる可能性さえ指摘された。

外国人観光客に関しては、静岡空港との距離や交通アクセスを考えると、静岡空港よりも羽田空港の再国際化に関心が向かうというのも止むを得ないことであろう。また、東アジアの国々向けの訪日教育旅行の取り組みは行っているが、教育旅行の中身（日本の文化、先端産業・技術の視察、ホームステイなど）を考慮すると、熱海はそうしたコンテンツの提供に十分対応出来ない面があり、この点の克服が今後の課題となっている。

(2) 旅館再生

われわれがここ数年行ってきた伊豆地域の観光ヒアリング調査において登場してきた新しい問題に、旅館・ホテルの経営破綻ないし廃業（閉館）およびその後の再生ないし後利用の問題がある。特に、伊豆地域の代表的観光地では温泉地全体としての「活力の発揮」という点でも、温泉地の雰囲気やイメージといった点からもこの問題は重要である。本稿がヒアリング調査報告であるということ踏まえ、ここでは基本的事実関係を中心に述べておく。

熱海市における最近の旅館・ホテルの廃業の原因は、経営破綻というよりは代替わりの際の後継者問題によるところが大きい。施設の改修に際しての資金不足、宿泊業の将来性への不安などが後継者に重くのしかかり、それが廃業を選択させるというわけである。また、廃業した旅館・ホテルの後利用であるが、旅館・ホテルとして再生されたものと、跡地にマンションなどが建設されたものとはほぼ半々であった。後者の代表的事例が2006年に閉館したプリンスホテル系の西熱海ホテル

¹⁴2009年2月21日付『日本経済新聞』による。

であり、また新しいマンションは殆どが旅館・ホテルの跡地に建設されている。同様に、ここ数年で新規開業した旅館・ホテルはすべて既存のものの衣替えしたもの（＝再生されたもの）である。以下ではいくつかこうした具体例を紹介する。

大月ホテルはオリックス系のミクラスに、水口園は若い女性をターゲットとした高級旅館ふふに、熱海ビレッジは第一興商が運営するチェーンホテルうたゆの宿に、ウオミサキホテルとそよかぜは伊東園グループに、国際興業グループの清流荘は格安ホテルのパイプの煙に衣替えし、老舗の伊豆山温泉の蓬萊は星野リゾートとの共同運営に移行した。

(3) その他

上でみたように、廃業した旅館・ホテルの半分はマンション建設に利用されている。こうしたマンション建設が進む中、いくつか問題も生じて来ている。例えば、居住よりも別荘として使用している人が多いという現実はどう対処するか、そのような中でコミュニティのつながりをどのように作り上げていくのか、街づくりをどのように進めていくのか、などなどである。

マンション購入者のうち高齢者の市への流入は定住人口増加という好ましい効果をもたらすが、他方で医療費の負担などを考慮すると市の財政面では持ち出しとなる可能性も持っている。この点で、東京への通勤圏という立地上の利点を生かして若い年齢層の流入を図ることは、定住人口増加という点で重要な課題ということになる。

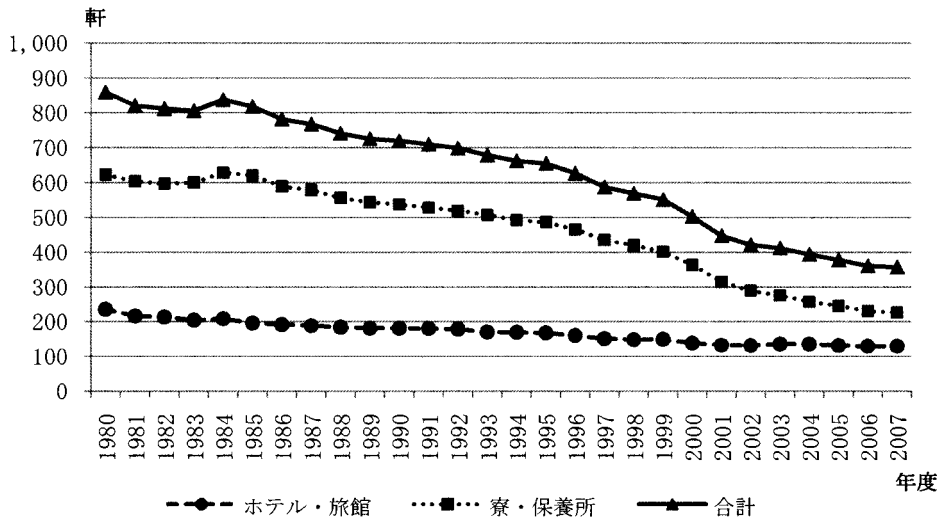
参考文献

- [1] 狩野美知子・野方宏（2009）『熱海市観光客動線調査報告書－2009年1月24・25日調査実施』
- [2] 経済産業省地域経済研究会（2005）『人口減少下における地域経営について－2030年の地域経済のシミュレーション－』
- [3] 野方宏（2005）「熱海観光ヒアリング調査報告」『研究叢書』（静岡大学経済研究センター）第3号（pp.35－40）、2005年3月
- [4] 静岡県産業部観光局観光政策室（2008）『平成19年度静岡県観光交流の動向』

参考URL

・ <http://www.atami-amic.com/>（アクセス日：2009年9月15日）

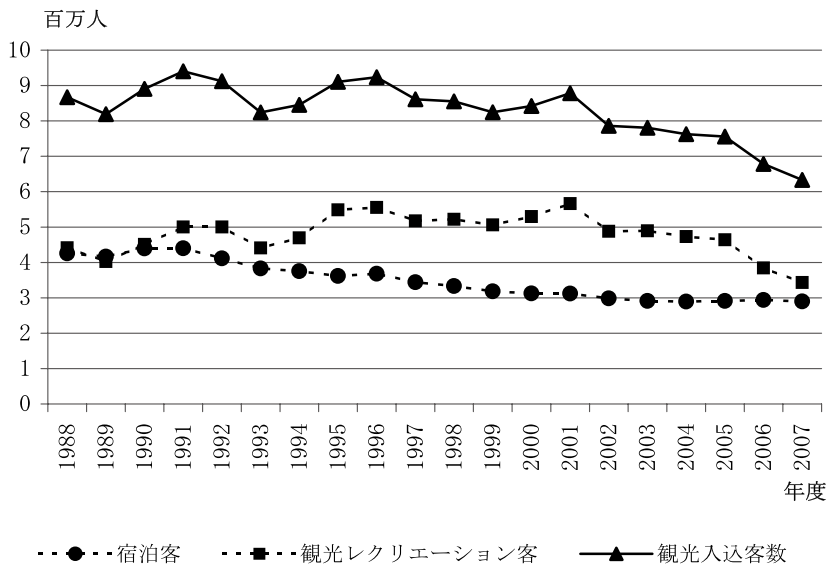
図1. 熱海市の宿泊施設数の推移



出所：熱海市『平成20年版熱海市の観光』より筆者作成

(注) 入手した資料は1973年度からのものであるが、統計の取り方に変更があるため、ここでは1980年度からのものを使用した。

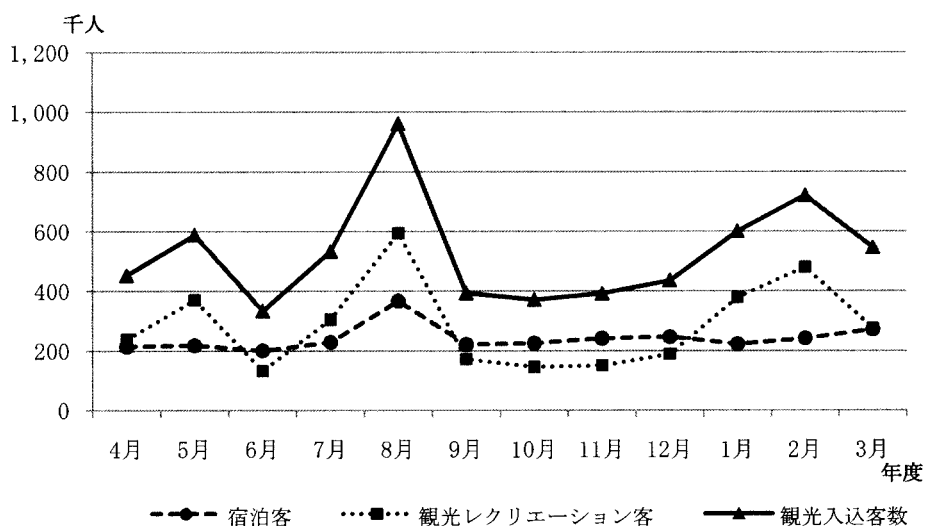
図2. 熱海市の観光入込客数の推移



出所：熱海市『平成20年版熱海市の観光』より筆者作成

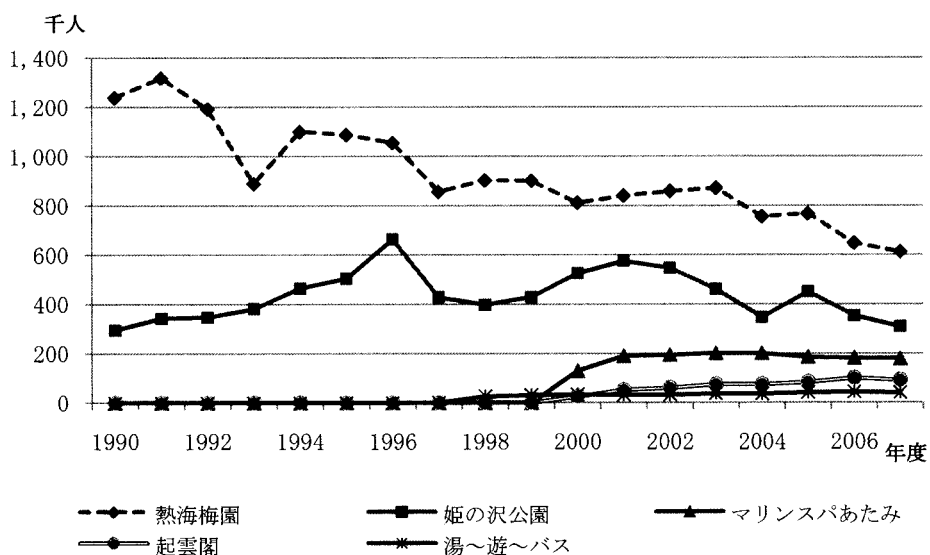
(注) 基本的に入湯税でカウントされた数値であるが、部分的に観光施設の数値を含む場合もある。

図3. 2007年度熱海市の月別観光入込客数



出所：熱海市『平成20年版熱海市の観光』より筆者作成

図4. 熱海市の主な施設の入場者数の推移



出所：熱海市『平成20年版熱海市の観光』より筆者作成

(注) 湯～遊～バスの運行は1998年から、起雲閣の一般公開は2000年から行われている。また、マリンスパの開業は2000年となっている。